

資料・黎明期速記者発言抄

A study about the remark about literature that stenographers
left at the beginning of the Meiji era

山本和明

はじめに

円朝翁の話速記するには折節三時間位やるので、其の場所は都下の静かさうな茶屋を選び、時には私の宅でやることもあつた。社内の人人の他には菊五郎なども来た。翁の話に挿絵をかく芳年翁は、いつも感極まつて大きな眼鏡の下からポロポロ涙を零して聴いて居る。名人の至芸に感ずる名人、幼い私の印象にも此の情景は今尚深く残つて忘れ得ない。

鋪木清方『絵具篋』（『清方随筆撰集』昭和十九年九月刊・双雅房）の一節である。清方の父親である山々亭有人と篠野採菊の自宅、あるいは茶屋において、円朝の至芸に聴き入る人々の姿を、清方は印象深く書き留めている。寄席とはひと味違ったその光景は、速記をとるためにわざわざ設けられたものであつた。明治のはじめ、講談・落語といった諸芸は、速記によって書き留められていったが、その実際の場であり合わせた幼年期の者たちにとって、こと

のほか印象深い光景だったのでらう。もうひとつ、同様の風景を描いた小文を引用しておく。

其の頃漸く講談速記が世に出て、新聞の続き物にそれが掲載されて居た。魯文は何処の新聞に関係して居たのか解らないが、同家へは時々松林伯円が遣つて来て、座敷の真ん中へ卓を据え、得意物の一席を辨じ、それを速記者に書かせて居た。其の講談が始まる時になると、魯文の家から子供衆を寄越して下さいと家へ迎ひが来て、私は能くそれを聴きに行つたものである。魯文の家の玄関には仏骨庵と云ふ額が掛かつて居て、どの座敷にも古い仏像が置いてあつた。魯文は其の当時古仏蒐集家で有名であつたと云ふ。伯円の講談を聴いて居る人達は老人か子供で、血氣の人は居なかつたが、講談は頗る面白かつた。其の時聴いた「伊豆倉屋騒動」などは未だに覚えて居る。私が伯円の講談を聴いたのはそれが一度切りであつた。それから間もなく魯文は死んだ。魯文の遺愛品だと云ふ仏像が、直きに道具屋の手に渡り、高価で売りに廻つて居ると云ふ事を聞いた。

木村銀花『三角の雪』（昭和十二年一月発行・三笠書房）に収められた小文「仮名垣魯文」から抜萃した。魯文の亡くなるのは明治二十七年十一月のこと。その頃も、語りの芸を記録するにあたつて、実際の寄席や講釈の場ではなく、あえてセッティングされた場でなされていたようである。そのつど、話のマクラなどで聴衆をひきつけ、本題にはいる芸と、それを記録し、読み物として活字化していくために演じられる芸とでは、やはり異なるものであつたのだろう。明治期にはじまつた講談落語の速記をめぐるのは、様々な形で記憶にとどめられ発言がなされてゆく。そうした文章を摘読し、ゆかしき明治の時世に想いを馳せたいものである。

では、その記録の担い手であつた速記者たちは、どのような思いをもっていたのだろうか。黎明期に活躍した速記者たちも、雑誌や新聞などに、数多く思い出話を書き残している。そのなかで、とりわけ講談落語を巡る発言をここで抄録してゆきたい。

今回、こうしたことを目論むにも理由がある。速記をめぐる研究は、相應に蓄積がなされている分野であり、そこ

でも速記者たちの発言は引用される。しかし、その引用がことのほか正確なものとは言えないのである。例えば『若翁自伝』からの引用として採りあげながらも、実際に該書にあたることなく、『日本速記五十年史』（昭和九年十月二十八日発行・日本速記協会）からの孫引きであることのどれほど多いことか。その旨を示しての引用ならば許されようが、そうではないことが多い。時には適宜案配しているにも関わらず、あたかも引用文の如き体裁をとっている。孫引きの孫引きといった笑えぬ例も見受けられる。『日本速記五十年史』で拔萃されたものに派生している誤記が、そのまま掲載、転載されていくために、初出掲載雑誌名まで誤ったまま通用している始末である。これではあまりに不誠実な姿勢と言うべきであろう。

速記本を巡って調べ、「円朝速記本流転」という小文をものしたが（岩波書店新日本古典文学大系明治編第7巻月報「明治出版雑識」、二〇〇八年十二月）、その際に、こうした状況を踏まえ、出来るだけ孫引きではなく『日本速記五十年史』などを手がかりにしながら出典にあたり直し、講談や落語に関する発言を中心に抄録する手続をした。以下、呈示する資料は、言うなればそのおりの産物である。

こうした資料を眺めてみると興味深い事柄を指摘することもできよう。例えば東京稗史出版社の社長が俄大尽になって遊蕩し、余りに金を使い社が潰れて仕舞ったといった指摘（『日本速記会雑誌』六号）もその一例である。その資料的価値を鑑み、ここに掲載するものである。翻刻をお許しいただいた個人、諸機関に深謝申し上げる。

資料紹介

〔凡例〕活版に組むにあたり明かな誤謬の生じていることもあり、そのままの形では不都合な面があることも否めない。よって、以下の方針のもとに紹介することにした。

- 旧字体は適宜新字体に直した。
- 濁点については任意に補ったりはずしたりした。
- 明らかに文字抜けのある場合、「」で補うことにした。山本による注記は字下げにして示した。引用本文には該書引用箇所「冒頭頁をへ」で示している。また「略」も山本によるものである。
- 速記者別に示すため、冒頭「」で人物名を呈示した。内容の重複する発言もあるがそのままとした。
- 出典は◆印以下で掲げている。
- 引用本文については、今村次郎「思ひ出草 三十年前の講談落語」を除き、総て抄出である。

【若林珪蔵】

◆「日本速記会雑誌」六号（明治四四年十一月一日発行・日本速記会発行）論評欄「日本速記大家経歴談」（記者）のうち「（十一）若林珪蔵」より抜粋

若林氏については、記者による大家訪問録に次のように記されている。「●最後に若林珪蔵氏（牛込砂土原町三の八）を訪ふた、斯界のオーソリチーとして名声赫々、（略）されど氏は極めて豪放磊落の人である、従て旧記簿書の如き捨て顧みず、自己の門弟すら、既に姓名を忘却し其人物をも記憶せざる者ありといふ位であるから、速記経歴の材料豊富なるに拘らず、氏の昵近者すら、是迄余り其詳細を聞くことを得ないといふことである」

「二〇頁」。仮にその発言を信じるならば、若林発言の詳細な点に如何ほどの信頼をおくべきかは少し留意する必要があるだろう。以下は、「記者が前日訪問した時、同氏と会談した二三の談片を紹介しやうと思ふ」《六七頁》とあるように、記者文責での内容である。

《六八頁》氏が矢野文雄先生の著述、経国美談を速記したのは、其翌明治十七年で、速記法といふ文字も、矢野先生が其巻末に「速記法の事を記す」といふ文を書かれたことから起つて居るさうである、此の経国美談といふ書は一般

の読書界に歓迎されたが、それと共に速記法の名声も亦大に世間に知れ渡つた、爾来氏は矢野先生に従ひ今の報知新聞の前身たる郵便報知新聞社に入り、専ら先生の速記をされたさうだが、其当時の月給は十円であつた、村井弦齋氏杯も矢張り月給十円で若林氏と同僚であつたとのことである、

此年に氏は郷里なる埼玉縣会の速記に従事された、これが日本に於ける縣会速記の嚆矢である、それから此年の秋に、氏は稗史出版会社の依頼を受けて酒井昇造氏と共に、落語家三遊亭円朝の新作牡丹燈籠を速記した、其時の模様を問ふたら、「出版会社の社主は、此著述が当つたので、忽ち俄大尽になつて遊蕩を初めた、併し円朝や僕等は別に大した報酬も貰はなかつた、其内社主は余り金を使つたので、社は潰れて仕舞つた、アハ、」と冷笑された、

そこで氏は酒井氏等と共同して、速記の出版事業をやつて、彼の有名なる塩原多助一代記を初め、続々出版をされた、大分利益を得られたと思ふが、物質上の利益よりも寧ろ名誉上の利益、即ち若林珮蔵の四字は天下に轟いたに違ひない、そこで門人も段々殖えて来たので、速記術教授に必要な著述が出版された、是が氏の心血を注ぎて改良創意されたる若林式の速記符号で「速記法要訣」と題する書である、其後氏は又之に改良を加えて「速記術」といふ書を発刊されて居るが尚ほ未だ歎焉たらざる者の如く、記者に向つて、「速記の符号はモツと改良を加へなければいけない」と、熱心の語氣であつた、

◆『サンデー毎日』5—46（大正十五年十月十七日）所載〈七頁〉「名人叢談／予と円朝—故三遊亭円朝の事ども—（上）」七十翁 若林珮蔵

彼の生活

余がはじめて円朝を知つたのは、明治十七年であつた。当時京橋に東京稗史出版会社といふ馬琴の八丈伝や何やと予約出版をする社があつた。その社主の中尾某が余の処に来て、当時一流の落語家三遊亭円朝の人情話を寄席の高座

で話すのをそのまゝ、速記して出版することを快諾したから、速記してくれといふことであつた。当時速記は甚だ幼稚で、殊に講談とか落語とかいふものは書いたことがないから、心許なく思つたけれども、速記を広めるには、最も好個の機会であると思つたので、兎に角承諾して酒井昇造氏とも相談し同氏の援助を得て、速記を引受けることにした。最初速記したのは、彼円朝の最も得意な「牡丹燈籠」で、あれは人形町の席亭末広亭で、円朝の高座ではなすのを高座の裏の楽屋で速記したのである。円朝の人情話は、いづれも半月十五日間に一卷を話し終る仕組になつて居るので、円朝も十五日間一夜も欠席せず、又吾々も毎夜欠かさずかよつて「牡丹燈籠」一卷を速記してしまつた。

「牡丹燈籠」は日本紙を用ゐた二十枚くらの小さな雑誌で、毎土曜日の発行で、明治十七年七月に第一号を発行した。ところが円朝の「牡丹燈籠」といへば平生寄席で聞きなれて居て、婦女子に至るまでよく知つて居るので、争つて購読して見ると、円朝の話のまゝ、現れて居るといふので、大に世間の興味を惹いて盛んな売方であつた。稗史出版会社では引続き円朝の話を出版する積りであつたが、「八犬伝」の予約出版中絶のため遂に解散の悲運に陥り、円朝の話も出版することが出来なくなつた、そこで余は甚だ遺憾に思つて居た。ところが「牡丹燈籠」発行以来屢々円朝と往復して、自然懇意になつた。そこで引続き余が道楽半分に出版したのが彼の「塩原多助一代記」であつた。「牡丹燈籠」は最初の試みであつたから、寄席でかいたけれども、寄席ではなすのは毎晩マクラをふるので話の連続が取れないやうになつて、面白くないから、特別に席を設けて話させよう、といふことになつて、「塩原多助一代記」からは第一流の料理屋とか待合とかの座敷を借りて、円朝の知人やその料理店の知己の人を招いて聞かせて、速記することにした。

円朝とその芸術

却説円朝は決して世間一般の芸人ではない。彼は頗る人格者であつた。別に深い学識のある訳ではないが、常識を具へて居て、文章も巧みに、歌も詠めば、俳句も作り、書も奇麗にかき、凡そ普通文学者のすることは、何事でも出

来ないことはなかつた。併しいづれも師について習得したのではなく、彼が明晰な頭脳で、何事も聞覚え見習ひして、自然に覚えたものと見える。殊に絵画はかつて国芳門下にあつて浮世絵を研究したことあり最も巧妙で、彼の「塩原多助一代記」の挿絵は円朝が残らず下絵をかき、それに季節、年齢、衣裳等を詳細に記載して、画工に渡した。その下絵は実に巧であつた。又彼が説話中に引用する訓戒的の歌は、多く、古歌であるが、俳句は大概自作であつた。その他彼はあらゆる遊芸は一と通り心得て居て、何芸でも批評する識見を有して居た。嘗て余が門弟と向ふ島の八百松に宴会を開いたとき、円朝をお客として招待したことがある。その時彼は陶然として興に乗じて端歌を踊つたことがあるが、実に軽妙極まるもので、その席に侍した柳橋一流の老妓も俳優の踊りと違つて嫌味がないと感歎してゐた。

◆『若翁自伝』（大正十五年十月三日納本、大正十五年十月五日発行・荒木竹次郎編輯、若門会発行（三三・三五）三七頁）

○「経国美談」の筆記

翌十七年には報知新聞の筆記から思付かれたものか、矢野文雄先生が「経国美談」の後篇を著述されるに付いて、其の速記を依頼され、下谷御徒町の宅から、芝南佐久間町の先生の宅まで日日通つて速記した。先生が一日に一時間くらゐ文章で口述されるのをかいて、即日清書して翌日往くときに前日の原稿を持つて往くやうにしたが、一日の速記は大概原稿紙二十枚くらゐであつたから、即日清書して、十分間に合つた。「経国美談」の速記は一ヶ月余で終つて、直に印刷に付されたが、其の巻首に、本書は若林が速記法に依つてかいたものであるといふことが書かれた。當時は翻譯小説の稀なるときで、殊に著者は名士である学者であつたから、非常に歓迎されて、発行部数も莫大であつたといふ。随つて速記の效用も世に知られるやうになつた。

○三遊亭円朝の「牡丹燈籠」

明治十七年には京橋の稗史出版社の中尾某、近藤某の両氏が来て、三遊亭円朝の人情話を其俣速記したら、面白いものが出来るだらうから、速記して貰ひたいといふ依頼であった。余は演説や講義は速記したことはあるけれども、講談落語の速記には経験がないが、演説や講義と違つて、事柄がやさしいから、書けないこともあるまいと思つて、これを引受けることに約束した。併し一人で失敗してはならないと思つて、酒井昇造氏に相談したところ、同氏も練習かた／＼援助することを承諾した。円朝には稗史出版社から交渉したところ、承諾を得たので。当時円朝の出席する人形町の寄席末広亭へ毎夜通つて、速記することにした。円朝の人情話は十五日間に一種の話を纏めることになつて居るから、円朝も十五日間欠かさず出席し、こちらも欠席しないことに約した。やがて末広の楽屋で、円朝が高座で話すのを聞いた。それが彼の得意な「牡丹燈籠」であつた。人情話の速記には経験のないところへ彼の得意の場面には雄弁にしゃべりたてるので、速記は随分困難であつたが、事柄が平易だから、二人で速記すれば、纏らないことはなかつた。「牡丹燈籠」は一席を一回として、毎土曜日に発行したところ、円朝の「牡丹燈籠」で十分売込んであるのを話の俣に読めるといふことが評判になつて、雑誌は非常な売行であつた。「牡丹燈籠」の雑誌の表紙の裏面にも、速記文字でかいたものを掲載したから、速記の広告にもなつた。円朝の話は速記に依つて世間に紹介され、速記は円朝の話に依つて紹介された結果を得たのである。

稗史出版社は「牡丹燈籠」で十分の利益を得たけれども、他の予約出版に失敗して、引続き円朝の話を出版することが不可能になつたから、余は円朝に交渉して、「塩原多助一代記」や「英国孝子伝」などを速記法研究会から雑誌として、発行したけれども、「牡丹燈籠」と違ひ、円朝の好みで贅沢なものにしたので、費用倒れとなつて、利益は得られなかつたが、これも速記の広告のためと思つて諦めた。当時は速記も多少世間から認められるやうになり、円朝の話は他からも続々出版され、新聞の読物としても掲載されるやうになつたから、円朝の話の出版は、右の二種

に止めた。

○松林伯円の講談

明治十九年には更に講談を速記して出版する計画をして、当時一流の講釈師松林伯円が得意の「安政三組盃」を速記し、雑誌として発行したが、これは円朝ほどには喝采を博することは出来なかつた、それが動機となつて、講談物を或は単行本として出版し、或は新聞に連掲することが流行して、東京市内の新聞をはじめ、全国の新聞に掲載されるやうになつたが、円朝の話や講談物の速記は酒井氏が専門にやるやうになつた、それより地方の新聞社から講談速記の依頼が続々あつて、一時は十数社の多きに至つたが、研究会員に速記させて、余は一切自ら速記しないことにした。

【酒井昇造】

◆「日本速記会雑誌」六号（明治四四年十一月一日発行・日本速記会発行）論評欄「日本速記大家経歴談」（記者）のうち「（二）酒井昇造」より抜粋

《二七頁》それから其年の秋のことでした、京橋に稗史出版会社といふものがあつて、其社の株主で妹尾といふ人から若林氏が相談を受けて、故三遊亭円朝の新作人情話牡丹灯籠といふ話を速記することになつた、けれども甘く書けるか書けぬか分らぬので、一日二人で試みに両国立花亭といふ寄席に行つて、高座の下でやつて見たが、だうも甘く行かぬ、けれどもマア少し位の所はどうにかしたらやれぬこともあるまいといふので、愈々速記をすることになつて、円朝の承諾を得て、池の端の吹抜亭といふ寄席で、今度は楽屋で以て書きました、若林氏は二三度欠席したが、私は、始から終迄十五席斗りのものを悉皆書きました、無論拙い筆であつて不完全ではあつたが、先づ兎も角も筆記が出来ました、それを其頃報知新聞の記者をして居た某氏に頼んで、甘く文章の添削をして貰つて、それから出版す

ることになったのであります、之を世に公にするに付ては、速記者の名前を揚げるが宜からうといふことでありましたが、私はまだどうも不完全の速記であるから、自分の名を現はすことを好まぬ、そこで若林氏の速記といふことにして、私は補助といふことで出版したのでありますが、何しろ珍し物好きの世の中ですから、これが大変の評判になつて出版会社は大層な利益を得ました、そこで私共も乗氣になつて、一つ我々有志の共同事業として出版をやつて見やうぢやないかといふ相談になつて、資本を四五人の者が醸出して、それから出版をやつたのが、彼の塩原多助一代記、英国孝子伝、業平文治漂流奇譚等であります、是亦非常の好評で、就中塩原多助一代記の如きは印刷の総部数十二万部も刷つたのであります、其後転々して此版權が石町の書肆上田屋の手に歸したのですが、散々儲けた後の版權料が八百円にもなつたさうです、其内自分も段々經驗を續んで来たので、明治十八年三月に初めて群馬縣へ行きました、此時若林氏門下の伊藤新太郎氏を助手として、私が主任となつてやりましたが、此時は先づ無事にやつて来た、同十九年三月には、若林氏門下の故小相英太郎氏と茨城縣会へ行きました、爾來二十二年迄引続き、同縣会の速記に従事しました、けれども其当時は速記の需要が甚だ稀であるので、こんなことをやつて居ても詰らぬから、寧ろ止めて仕舞はうと思つたことが幾度もありました、(略)

《二九頁》所が丁度二十年の頃でありました、やまと新聞社主筆大澤基輔といふ人から相談があつて、落語家三遊亭円朝の人情話を速記して呉れといふことで毎号連載することになつた、同社は日本で講談落語の速記を新聞に掲げた嚆矢でありまして、従て速記といふもの、真価を普通一般人に示したのであります、やまと新聞は之が為非常に売高が増加して、円朝の外に柳桜とか円生とか、講談師では桃林とか伯円とか、一流の芸人の面白い続き話を附録として出したこともあります、丁度二十年から二十五年頃迄私はやまと新聞の速記をやつて居ました、当今講談落語速記で名前を売出した今村次郎といふ人は、私の門下生でありまして、此頃やまと新聞社に居て校正係をして居たので、大澤主筆からの紹介で私が速記を教授しましたが、此人は遂に成功しました、そこでやまと新聞が一度び講談

速記を掲載してから、盛に江湖の歡迎を得たので、明治二十一年に金蘭社から「百花園」といふ講談落語専門の速記雑誌が生まれて、私が依頼を受けて総て速記しましたが、其売高は非常なものでありました、当時金港堂で発行して居た「都の花」といふ小説雑誌は、最も売行の盛んな雑誌で、毎号八九千は売れたといふので雑誌中の巨擘とされたのですが、それにも増して、百花園は、一号より十号頃迄は、毎号一万五六千も売れたといふことであります、其他小説書林から速記本出版の為に、私が依頼を受けまして書いた物は、実に何百種といふ数に達して、殆ど記憶が出来ませぬ、円朝の話杯は私が皆書いて仕舞つたので種切れになつた、是等の書物が私の手元に沢山ありましたが、人が来ては貸して呉れと言つては皆持て行て仕舞つて、今日はモウ一冊もありません、又円朝子の手紙杯も沢山所持して居ましたが、諸処転居の際何時となく散逸して仕舞つて、目下手許には一通もありませんが残念なことをしました、それから東京を初め地方の新聞社からも講談速記が流行で、続々速記を依頼して来たので、一時は目の廻る様な多忙を極めました、そこで門下生の今村次郎、加藤由太郎、吉田欽一杯といふ者に手伝はせて、盛に此方面に發展したのであります、そこで明治二十三年に愈々帝國議會が開ける時に、私は推薦されまして、衆議院速記者に無試験採用の榮を得ましたといふことは、衷心深く愉快に感じたことであります

【今村次郎】

◆今村次郎氏談「思ひ出草 三十年前の講談落語」(『日本速記協会雑誌』一号 大正九年九月発行(二六〇―二九頁))
 ▲三十年前には講談落語の速記を載せたのは新聞社のみで雑誌にはなかつた、殊にやまと新聞が其初めてやまとは此講談で売つたものである今では講談落語の速記は講談師の家へ行つたり講談師が速記者の所へ来て速記をするやうにして居るが、今から三十年も前は、立派な料理屋へ講談師を招いて、お客として社長編輯長其他社に關係ある人が十人位ズラリと列んで聴いて居る、それを速記したもので、速記が済むとお膳が出て立派な御馳走がある、今日にして

見ると一人前五円位の料理であるから一席の講談を速記するには非常な入費がかゝつたものであつた、尤も其時分は演者は講演料などは望まず、自分の講釈が新聞へ出るのを非常に名譽にしたものであるから社から演者への礼も中は幾らであつたか包み紙であつた。

処が柳桜といふ落語家で人情噺をする人が、大勢の前で固くなつて御馳走になるよりは、それだけの物を金で貰つて自分の家で寿司でも食べながら話をして速記して貰つた方が宜いと言出した、新聞社でも其方が金が掛らず、さう平易に出来るならといふので、演者の家へ行つたのが、今日互に演者と速記者の間の往復となつたのである。

▲其頃講談落語を速記して居られたのは故人になられた小相英太郎、酒井昇造、石原明倫氏（以上故人）や若林珪蔵、佃与次郎、加藤由太郎、吉田欣一の諸氏に私などであつた。私は酒井昇造氏に就て学んだので、酒井氏は私の恩師である、私は十七歳の時やまと新聞社から速記修習を命せられた、今でいふ練習生であつたが、其頃は速記者が少なかつたから、やり初めて二三月もするとまだかくと攻められた、苦し紛れにまだ出来もせぬのに酒井さんに付て実物に當つて見た、けれども普通の演説より困難な講談落語の速記が何で三四月の修業で書けるものでない、けれども傍に人が見て居ると脱けたり間違つた所などは何とか思はれやしないかと思ふのでそれを直しながら一ぱし書ける振をする、今考へて見ると可笑くもあるが、実に人知れぬ苦心をしたのである、其のお蔭で比較的早く世の中へ出る事が出来た。

▲其頃は演者が速記をする前にはスツカリ材料を蒐めるやら順序を立てるやら十分の準備をしてかゝつたものである、松林伯円（先代）などはイザ速記をやるとなると、講談が終局まで十五席あるとすれば、一日五席講演するとして三日速記にかゝると予定して、三日間は寄席を休んで速記に専心する、故に始から終まで筋が一貫して居た、現今の若い講談師が一夜漬の話をするのは雪泥（ユキド）の差であつた（一）殊に昔の講談師は見識があつて、自家で速記をする場合でも決して家人は其席に居らしめない、といふのは色つばい所や泥棒物などを妻や小供に聴かせたくないといふ

考へからで、寄席などでも決して家人には寄席で聴くことを許さなかつたものである。

▲従つて其速記も厳密なもので、出来た原稿は必ず一度読んでやつて安心を与へた上新聞社へ送つたものである、それは万一間違つたことを出されては名に係はるといふ速記に対する不安もあつたらうが、一言一句苟くもしないといふ一の見識のあつたことは争はれない。それに就て面白い話がある、其頃水戸の薄舞といふ煙草があつた、それを柳桜といふ人が江戸ツ子口調で『うすめへ』の煙草といつた、私が速記をして其原稿を読んでやる時に『うすまい』と言つたら、それは『うすめへ』でなければならぬといつた、此辺に一言一句も苟くもしない所が窺はれるではないか。

▲其頃速記を能くした講談師は伯田、桃林、燕尾、貞水（何れも先代故人）伯知、実、落語家では柳桜、柳橋、禽語楼小さん、燕枝、円遊（何れも先代）などで、其中で最も速記の骨の折れたのは小さんと円遊で、此二人の速記が出来れば先づ一人前だといはれたものであつた、桃川実などはズツト後に出た人であるが、此人位速記の流行つた人はなく、朝早くから三四人から多い時には八九人も速記者が詰掛けて、各人が済むのを待つて速記したといふ全盛であつた、此実も中々早口で速記としては楽ではなかつたが誠に書き良い読口で筆と口と一緒に動いたのは此人ばかりであつた。

▲当今で速記の骨の折れるのは、講談師には少ないが、落語家では小勝、円右、さん馬、円藏などは難物である。

▲日本速記倶楽部で神田の警察の隣の東京商業学校を借りて、林茂淳さんや其の他速記者が大勢集つて、速記に関する話をし合つたことがあつた、其時に私は他の速記と異つて講談落語は娯楽的に読ませるものだから、余り間違つたことやてにをはの間違つた所、重言片言があつたら直すやうにした方が宜いと思ふといふ意見を述べて諸君の同意を得たことがあつた、私はさういふ頭を以つて速記に臨んで居るが、人に依つては速記は間違つたことでも何でも全部書いて其紙紙上へ出すものであるといふ人がある又は講談落語は直して書いた方が宜いといふことを考へ違ひをし

て、全然演者の口吻を形無しにして仕舞ふ人があるが、是等は共に興味を失ふばかりでなく、速記とい（お）もの上から言つて決して忠実でないと思ふ。

【佃与次郎】

◆佃佃与次郎著『速記の話』（昭和二年十月廿八日発行・佃速記塾・定価金七拾銭）

本書は三部構成からなり、第一章は速記の話、第二章は速記の演説、第三章は成句熟語からなる。ここでは第一章と第二章から抜萃した。冒頭に「第一章の速記の話は明治四十一年十月の速記発表記念日から其年の年末まで、東京朝日新聞に連載した原稿である。」（一頁）とある。また第二章は二つの口演演説を掲載するがここでは「大正十五年十月二十八日の速記記念日に於ける放送の口演」の中から第四節を抄出している。

〈八〇頁〉 四十 講談本の教育（以下略）

▼講談速記は下卑たものだ俗なものだと攻撃される、下卑たものには違ひない、俗なものには違ひない、嘘もある法螺もある、併し民度の上から今の社会には丁度講談速記が適当して居るのだ、大声は俚耳に入らず、名家の小説よりは講談本が売行の多いのも分る、東北地方で貸本屋の六分は講談本ばかり、房総の海岸あたりになると八九分まで講談本で店を飾つて居る。

▼原稿料の多少を問ふ事勿れ、地方新聞に講談速記の有無は新聞の売行きに大関係がある、此に於てか近頃堂々たる小説家先生も講談の焼き直しを始めて、荒木又右衛門とか岩見重太郎とか云ふことになつて来た、妙な傾向だが此方が果して売れるからをかしい。

▼講談速記は人を教育する目的でないことは勿論だが、之に由つて忠孝を覚え、之に依つて貞操を悟り、感憤して過ちを悔ゆる輩も事実無いことはない、高い理想を説いて聴き流しにされるよりは下卑た道理が却て耳に染み込み易い

こともある、俗なりと言つて馬鹿には出来ない。

《一〇七頁》速記発表記念日に際して 大正十五年十月二十八日（東京放送局に於て放送）

第四 私 は田舎出の書生で、東京人のやうに落語や講談などを聞き慣れてゐない関係から、斯う云ふ種類の速記は甚だやりにくい、それでも準備時代の当時は速記者が少かつたものでありますから、私のやうな者でも頻りに依頼を受けて書きました、三遊亭円朝、邑井一、桃川如燕、以下随分書きまして鼻を高くして居りました、其頃円朝の弟子で円遊と云ふ落語家があつた、是は大きな鼻の持主で有名な早口の人であつた、妙な手つきで鼻を撫でるともなく、摘むでもなく妙な手つきで鼻をこする、それが売物となつて新聞に鼻の絵があると直きに円遊のことだと察することが出来る位であつた、その落語を書いてくれと云ふ依頼で、宜しいと引受けて出掛けて、書初める前からサア可笑な風をするので腹の中の虫がクツクツ笑ひの頭を擡げる、愈話が進むと其身振りや容貌を見ると可笑しくて、堪らないので鉛筆を持つたま、クツクツと笑ひ出す、是ではいかぬと怵へやうとしても自然にゲラゲラと笑つてしまふ、速記者が笑ひ出しては書けるものではない、恐く速記をして居ながら其可笑しさを堪える位苦しいことはない、どうしても自分の笑ひを制止することが出来ない、程可笑しさが込上げて来て止め度がない、自分は頻りに洪面作つたり歯をくいしばつたり膝をつめつたりして見るが効力がない、話す方では得意になつて笑はせる、到頭此速記は三分の一位しか書取れなかつた、要するに私の田舎天狗の鼻が美事円遊の鼻に蹴飛ばされた形であつた。

【伊藤新太郎】

◆「日本速記会雑誌」六号（明治四十四年十一月一日発行・日本速記会発行）論評欄「日本速記大家経歴談」（記者）のうち（一）「伊藤新太郎」より抜粋

《三三頁》又当時やまと新聞が三遊亭円朝に其新作の落語人情話を講演させて其速記を紙上に載せ始めた、これが非常に人気に投じて同紙の声価は非常なものであつたが、これは小相英太郎氏が主として速〔記〕をし記て居られたが、これも私に助筆して呉れといふので、数回助筆をしたことがある〔〇〕或時社から向後は私に頼みたいと云ふ話が出たけれども氏に対する徳義上に省みて只時々助筆をするだけに止めたこともある、

（了）